



指導法改善のために

南 信 子

指導法改善の為というテーマで、自由にかくようにということであるが、方法を論ずる為には、その目的を明確にしておかねばならないので、特に指導法そのものを規定する関係にある幼児教育の目的や、本質的な問題にもふれつつ、今日の現実の幼稚園や保育所の実状から、指導法に改善の余地があると思われる幾つかの問題について考えてみたいと思う。

従来の伝統的な幼稚園や保育所の教育においては、対象が幼い子どもであるにもかかわらず、家庭教育を補うとか、小学校教育との連関をもつという意味のもとに、その教育の重要な目的の一つを文化的遺産の伝達においてきたところに、私は今日もなお、改善の余地が残されている問題点の一つがあるように思う。勿論人類の長い歴史がきずきあげてきた文化的遺産の伝達ということは、教育の大切な機能であり、幼児の教育においても、それが程度、期待されることを否定するものではないが、果して幼児の時期にその事がど

の程度可能でありまた必須な事であるかということを考える時、現在の幼稚園や保育所の保育内容とその指導法に多くの疑問をもたざるをえない。私の住んでいる地方で、幼稚園に子どもを出している父兄三〇〇〇名に対して、幼稚園に何を期待するかという質問を出したところ、文字や数、絵の描き方などを教えてほしいという父兄が、その七〇%をしめ、小学校に入学の準備教育をしてほしいというのが八〇%をしめている。これによっても、今日一般に幼児教育の重要性は叫ばれているが、その本質を把握せず、誤った考え方をしている父兄たちが、非常に多いことが知らされるのである。これに対して、保育者は確信をもたず、これを指導する立場にたたず、幼児教育をあやまった方向にもってゆくことをおそれるものである。子どもたちは早くから数や形、色彩、時間、空間など、ものの世界における重要な要素のなかに自分を見出さねばならないし、数を算えることや、文字をよんだり、書いたりすることは、社会人とし

ての基礎的な能力であるから、その指導の時期と方法をあやまってはならないことは勿論である。またおとなの社会の文化を早くみにつけさせることは一応子どもを早くおとなにし、子どもの成長発達を促す方法ではある。しかし従来の幼稚園や保育所におけるような単なる知識の伝達、模倣、反復による訓練、技術の伝授、ひどいになると、有名小学校へ入学の為のテストの準備に至っては果して子どもが本来、伸びるべきものをじゅうぶんに伸ばしうるか、また過去の文化的遺産の上に、次の時代を創り出す力をもった子どもを育てあげることができるといえることが問題になる。この点で私は今後の進歩的な幼稚園や保育所における幼児の教育においては、もっと幼児期独自の教育を徹底させなければならぬと思う。文化的遺産は単に伝達することよりも、子どもたちが彼らなりの生活の場で直面する多くの問題を如何にいきいきと受けとめるか、その問題解決の基本的な態度や力、文化的印象に対する感受性を養うことが目的となつてこなければならぬと思うし、過去の文化的遺産の上に、新しいものを創造する力を養うことがねらいとならなければ無意味であるように思う。数を算えることを単におぼえさせるのではなく、彼らの生活や遊びの中で、同じ形のものや、異なった形のものを見分けたり、物の構造や、性質をよく観察したり、原因と結果について判断をしたりするなど、生活全体に知能を伸ばすような保育をするならば、遊びや生活の中で数的な必要がおこった時に、自然

にこれを導く機会が与えられると思う。絵や、歌やリズムを教えるにも、概念的な色や形を教えたり、音符の長さや、拍子やリズムについての音楽的知識を教えることよりも、美しい色彩や音に対する感受性を育て、彼らが楽しんで、絵や、音楽を通して自己表現をするように導かねばならないのである。習慣化することを最も強調するしつけにおいてもそうである。おとなに対して挨拶することを単に命令して強制するのではなく、おとなに対する信頼と尊敬の念を養ってやることに心を用いなければならぬのではないだろうか。ここに私は従来の文化的遺産を伝達する為の教師中心の指導法に大いなる改善を加える必要があることを痛感する。教師は理屈やことばで教えようとしない。知識や技術を伝授することを最も重要な役割と考えるところに問題点がある。子どもがおとなのような知識や技術を身につけると同時に教育の効果をあげ得たと思うのは早計である。保育者は知識を与え、命令し、模倣させ、反復訓練し、伝授することを以て足れりとする方法から脱して、子どもをして感じさせ、自ら選ばせ、考えさせ、活動させ、創意工夫させることを考えて指導することに吝かであつてはならない。劇の台詞を棒暗記させ、登場する場面を反復練習し、教師の描いた舞台背景におとなの感覺表現の衣裳やお面をつけ、不自然な動作を模倣して、父兄や観衆の前に発表される劇の中の子どもは、人形師にあやつられる人形のように生命がないが、教師と子どもたちが一つとなつて脚本をつく

り、彼ら自ら感動し話しあい役割を分担し、創意工夫をこらして遊ぶうちに、その劇中の人物に共感し、その見方、感じ方、考え方を身につけてゆくように指導されるならば、それは人間形成に大いなる役割を果すことになる。教師の権威と保護の中で、単におとなの文化を伝授するのではなく、あらゆる生活の場で、子ども自らをして、如何に自由にのびのびと活躍させるか？この事を発見しようとするのが指導法の改善として望まれる所以である。子どもたちが過度の緊張のない落着いた自由な雰囲気の中で生活させる時、彼らは生きいきと歌を創作し、詩を吟み、のびのびと自己表現する。

豊かな材料と過度な変化と刺激にみちた環境は子どもたちに創造的意欲をみなぎらせる。同じ室の中に、ある時はサークルで、ある時はグループで、ある時はひとりひとり思いおもいに嬉々として満足した経験をすることの楽しさ、こうした子どもの充実した姿をとらえ、これを指導することのできる能力をもった保育者とならなければならぬ。そこに形式におちいらぬ弾力性のある指導法が生まれてくるのであると思う。

ではこうした望ましい状態をうみ出す環境とくに望ましい経験内容とは何であろうか。幼稚園や保育所の教育は、学習指導をするというよりも、生活指導でなければならぬということはよくいわれるが、私はもっと徹底して、この事を考える必要があると思う。この時期でなければ出来ない楽しい経験で彼らの生活を満してやりた

い。保育内容の六領域に固定して考えるのでなく、彼らの生活に直結したあらゆる経験を望ましいものとして繰り返しひろげることが考えられてよいと思う。彼らの発達や興味、要求にそった生活、そこには遊びがあり、夢があり、現実の生活がある。

音楽、文学、絵画製作などはどの子どもも喜ぶ経験である。手洗い、歯磨き、洗濯、靴みがき、掃除、片づけなどもよく指導すれば、子どもたちの大好きな生活の一コマであろう。お誕生日会や、クリスマス、ひなまつりなどの為の、クッキーやゼリーづくり、林檎やき、食卓や室の装飾、お客様の接待や案内状の印刷などになると子どもたちは一人前のおとなのような緊張ぶりをみせる。グループによるまごど遊び、お店遊び、乗物遊び、郵便ごっこ、劇あそび、ゲームなどは時を忘れて没頭する遊びである。落葉拾い、虫とり、動物の世話、遠足、散歩、時計屋や小鳥屋さんへの見学には、目を輝かせて新らしい未知のものへの懐れでいっぱいになる。子どもたちは興味のあるところに、才能のあるところに、特に満足した経験を、それよりもすべての子どもがいつかどこかできつと自信にみちた経験をすることが望ましいし、それを願って教師はいろいろ心を砕いて計画をたて準備するのである。勿論ひとりの教師が受け持つ子どもの人数は、年齢が低ければ低い程極めて少数でなければならぬし、ある程度の室や庭の広さが要求されるが、それにもまして心の琴線にふれあう子どもたちと教師の親しい交わりの

中にこれらの経験が繰りひろげられることが必要なのである。

さて、こうして子どもを主体的に活動させることを計画する時、どうしても問題になってくるのは、ひとりひとりの個性を如何に捉えるかということである。発達や興味、要求、個性の相違などが理解されねばならない。四歳と五歳の子どもは非常に違っていることが切実に考えられなければならないし、AとBとは全く異なった人間であることを理解しなければならない。すべての子どもをクラスの平均や、最高の標準ではかるのではなく、ひとりひとりをその成熟の尺度ではかることが必要となってくる。その子どもの問題はその背景にある家庭や社会とも関連があることをさとらなければならぬ。私は現実の保育にもっと強調され、改善されなければならないのは、この個性を如何に捉えるかということに対する問題点をついた指導法であると思う。どんな子どもでも常に問題をはらむきびしい現実にはたされる。問題をもっている子どもは特に不幸である。大勢の子どもを一斉に統一するのが保育の技術の最高のものと考えるのでなく人間形成の大切な時期に、ひとりひとりの子どもを如何に指導し、望ましい方向づけをするかということが最大の関心事であり、そこに教育の使命があることを自覚した指導法が生まれてこなければならぬと思う。教師の個人的な感情や、近視眼的な観かたによらず、もっと客観的な科学的根拠にたった指導法によらなければならぬと思う。テスト法や、プロジェクト・テクニク、

ケース・スタディ などあらゆる幼児教育の研究や学問が用いられなければならないし、ひとりひとりが集団の中で劣等感をもたず、優越感をもたず、しかも弾力性をもった身も心も健康な子どもとして、自主的でまた社会的な、望ましい態度をみにつける為、教師は絶えず心を砕き子どもの側にたつて、子どもと共に、問題を解決し、そこから指導法をさぐり求めてゆくことが大切ではないだろうか。

最後に私共が子どもの指導にあたる時、最も効果を容易にあげることのできる集団を利用する指導法を再認識したい。子どもの興味、性格能力などによって構成される小さなグループの指導、問題治療を目的とするルーピングなど、これらによる教育の効果には期待すべきものがある。特に幼児期においてこの効果が著しいことを忘れてはならない。

以上、文化的遺産の伝達と、教師中心による方法の問題点から、自由な環境の中でひとりひとりの子どもが楽しいしかも有効な経験をさせる為の指導法として幾多の問題にふれてきたが、子どもの幸福とよりよい成長発達の為に、今後も、たゆみない研究がつけられなければならないことを痛感する。ゲゼル博士がいわれたように「乳幼児相手の仕事は、子どもへの心からの暖い関心と、その心理についての専門家としてのリアリズムとが結びついていなければならない」としめじみ思うのである。

(北陸学院保育短期大学)